

自由原稿

再評価される盧泰愚元大統領

新井 宏

もう十年以上も前になるが、韓国の学生達に盧泰愚のことを聞くと、ほとんど例外なく、最低の大統領だったという。

「いや、そんなことはないでしょう。軍事政権から流血なく文民政府に移行させたのは、盧泰愚大統領じゃないのですか。彼がいなかったら、今の韓国は、まだまだもたもたしていたはずですよ」と言うと、変なことを言うヤツだとの顔をする。

実は、それほどまで不人気であった盧泰愚大統領がこのところ韓国で再評価されている。

今の韓国は、盧武鉉の行き過ぎた「民主化」の後遺症で、保守政権の朴槿恵大統領さえも、「慰安婦問題」と「竹島問題」で「反日」を唱えないと、国民の支持が得られない。

しかし、本音の部分では、もっと現実的な対処を模索していた。野田内閣の時には「面子をたてる」という線でいったん折り合いが付いていたのに、安倍内閣がそれを反故にし、靖国参拝まで強行したので、振り上げた拳を下ろせない面が大きいのである。

そんな中で、やっと韓国でも、盧泰愚元大

統領を現実的に、肯定的に評価する論調が現れていることに注目している。それは「最低の大統領」を再評価する姿勢が、日韓関係を現実的に処理することに通じるからである。

例えば、四月二日付の「中央日報」の論説は、朴槿恵の「ドレスデン宣言」、すなわち、中国を意識して米国一辺倒を廃し、和解・交流・協力から南北統一に向かう構想に、冷やかではあるが「我々は統一をきちんと準備しているのだろうか」と自問し、続けて「南北関係改善の突破口を開いた盧泰愚の転換期的なリーダーシップに解答がある」と、次のように盧泰愚を持ち上げているのである。

まず、盧泰愚は、国会を野党に握られた悪条件下にもかかわらず、南北不可侵を強調した南北基本合意書、非核化共同宣言、南北国連同時加盟などを韓国の主導で引き出し、生産国家の中国・ソ連と修交し、米国から平時作戦統制権の返還を受けたことなど外交面で大きな成果を挙げている。

更には、軍出身にもかかわらず「すべての外交は内政の成功に基づく」という信念を持ち、ソウルオリンピックを成功させ、最低賃金制導入、医療保険拡大、国民年金拡大など社会統合的な福祉・労働政策の基礎を確立した。

あるソウル大教授は『盧泰愚時代の再認識』という本を出し、又、ある高麗大教授は「盧泰愚を、かつらをかぶった全斗煥と呼んだのは速断だった」と反省している。

だから、威張って言うならば、私の見解は韓国よりも十年ほど進んでいたことになる。その証拠と言うわけでもないが、三年前の『まんじ』二二二号に、結構な長文を載せている。ちよつと抜き書きして紹介しよう。

そもそも、私が盧泰愚に注目したのは一九九〇年に来日した時の演説にある。彼は日本人でも知る人の少ない雨森芳州の「善隣外交」を引いて日韓友好を訴えたのである。この盧泰愚の演説によって、雨森芳州の日本での再評価が進んだ。

さて、韓国に朴正熙の軍事政権が誕生したのは一九六一年である。その頃、韓国の一人当たりの国民所得は年六十ドルに過ぎず、北朝鮮の経済力の方が圧倒的に強く、南北学生会談に向けてソウルを出発した学生らのデモは十万人に達し、赤化される危機にあった。

しかし時の張勉内閣にはこの動きを抑える力が無く、朴正熙のクーデターは必然的なことであった。

朴正熙大統領は軍事政権でありながら、「漢江の奇跡」を成功させ、続く全斗煥も、物価

安定、国際収支の大幅黒字、高度経済成長という三兎を一度に捕まえた。この二人の大統領は政治面では凄まじい批判や非難の対象になったが、確固たる統治哲学をもち一貫性のある経済政策を進めたと評価されている。

それに対して、その後を継いだ盧泰愚はビジョンも哲学もなく経済が大きな打撃を受けたと批判されている。果たしてそうなのか。ちなみに盧泰愚の五年間の経済発展は年率十四％であり、驚異的な水準であった。次の金泳三が国家破産に瀕し、国際通貨基金の管理状態に陥ったことと比較すれば明白であろう。しかも、盧泰愚は軍事政権から文民政府へ流血なく移行させたばかりでなく、開発独裁の強権経済から自由経済に軟着陸させるのに成功したのである。

私が盧泰愚を評価するのは、不利を承知で、全斗煥を裏切ってまで直接選挙制を受け入れたことにある。一見、盧泰愚は温和な性格のため優柔不断と見なされやすいが、信念を暖めていて立つべき時には立つ人物であった。

特に評価したいのは、対北朝鮮問題への深い洞察力である。在任中の一九八九年にはベルリンの壁が崩壊し、翌年には東西ドイツの再統一が実現する。朝鮮半島の統一は韓国の悲願ではあるが、現実問題として、体制の異

なる貧しい北朝鮮を統合することなど、韓国に耐えられるはずがない。とにかく国内問題としてではなく、国際問題としてこれに対応するしかない。それが盧泰愚の判断であり、それを具体化したのが、北方政策における「遠交近攻」であった。

ソ連には三十億ドルの経済援助を与え、国交を回復、北朝鮮への安価な石油供給や戦闘機や武器の供給を中断させ、北朝鮮に多大な打撃を加え、しかも、韓国・北朝鮮の同時国連加入という大成果をもたらした。

以上、韓国のマスコミに先駆けて、盧泰愚の再評価をしたとの自慢話である。